

顕彰会便り

NO.5

昭和62年(1987)10月15日

編集・発行

津田左右吉博士顕彰会

(美濃加茂市太田町3425-1)
TEL.0574-25-4141

日本歴史を求めて

—津田左右吉—

大正五年(一九一六)から十年(一九二一)にかけ、「文学に現れた我が国民思想の研究」という、四冊の本が次々と出版された。岐阜県が生んだ、近代日本を代表する歴史学者であり、東洋哲学者でもある津田左右吉の著作である。

時間もなく、研究にも打ち込まず、思い悩む毎日が続いていた。

このころ、幸いにも、東京のドイツ学協会から、彼に来てほしいという要請があったのである。なんとしても心のもやもやをふつきりたいと思っていた彼は、これを転機に学問研究者として生きようと決意した。

左右吉は、明治の初めに、下米田(今の美濃加茂市)で生まれ、新しい社会の発展とともに育ってきた。それだけに、明治維新には深い関心をもっていた。そこで彼は、幕末から明治維新のことについて、思想の面から考えてみることにした。ヨーロッパ文化

から学ぶために、まず、幕府が取り寄せた書物を読むことから始めた。これが、研究の始まりであった。ところが、一つの疑問を解決しようと思つてそれにかかわる書物を読むと、それは解決しないまま、また新しい疑問が生まれてくるのである。また、一つの疑問を解決したことにより、別の新しい疑問が生まれてくることも数多くあった。こうして、次々と疑問が増していったのである。

いつものように机に向かっていた彼の頭に、ふと、こんな思いが浮かんできた。「どんなことでも、そのことだけを見つめていては、その内容や意味を本當につかむことができないのではないか。もつと広くその時代のこ

とを知り、さかのぼって、その時代の初めからの文化や社会の情勢や歩みを知らなくては……」

こうした研究方法に気づいた彼は、さっそく翌日から、江戸時代の初めにさかのぼって研究を始めた。しかし、江戸時代に書かれた書物は、何種類もの写本として伝わっているものが多く、まとまった形ではなかなか思うように手に入らない。そこで、勤めのかたわら、比較的よく集められ、整理されている上野の図書館へ寸暇をおしんで通った。

こんな生活が四年ほど続いたであろうか。江戸時代の書物を直接自分で読み、考えているうちに、どうやらこの時代の思想の動きや、そこに生きた人々の見方、考え方、感じ方などが分

かり、それについての左右吉なりの考えも出てきたのである。研究者としての自信も生まれてきた。原典を直接読み、考えてきた左右吉には、これまでのもとはちがった見方ができるようになってきていたのだ。しかし、一方で、自分の考えをもっと確かなものにしていくためには、江戸時代の研究だけしては十分であることに気が付いた。

江戸時代の人々のものの見方、考え方、感じ方は、もつと昔からの人々の生活に深くかわり、その歩みの中ででき上つてきていると思われたのである。

こうして彼は、前の時代、前の時代へと引きずられるようにさかのぼり、いつのまにか上代にまでたどりつくことになったのである。彼の大きな学問的業績の一つに、古事記・日本書紀の研究に代表される古代史に関するものがあげられるが、その出発はここにあったともいえる。

明治維新のことから始まって、古事記・日本書紀の時代にまでさかのぼって研究してきた左右吉は、今度はこれまとは逆に、上代から始めて



31才の頃の博士

近代に下っていくという順序でまとめていこうと思った。これが、最初に述べた「文学に現れた我が国民思想の研究」だったのである。

書き始めてみると、今まで分かったと思っていたことが分からなくなり、もう一度原典を読み直して考えてみなければならぬことが、次々と出てきた。ときにはかなり書き上げてきたものを、満足できずに破り捨てたこともあった。また、日本のことを本当に分かるためには、世界の民族の神話や、特に、日本の文化にかかわりの深い中国や朝鮮のことを研究する必要を痛感した。中国や朝鮮の古い歴史や古典の研究は、絶対に欠

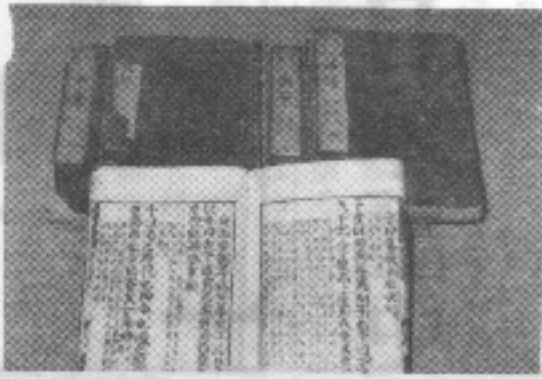
かすことができないことだったのである。彼は次第に、この方面にも力を注ぐようになった。

こうして、幕末から明治維新への一つの関心から出発した彼の研究は、真理を求めてどんどんわくを広げ、その内容も深くなっていくたのである。書き上がった本は、彼の代表作の一つとなり、その後の彼の研究の方向や、学問姿勢の基となる意義深いものとなった。

津田左右吉博士を紹介したこの文章は、昭和六十一年八月に発行された郷土の道徳中学校用「郷土史研究に

うちこむ」(著作：岐阜県教育委員会、発行：岐阜県小中学校長会)から許可を得て関係部分転載したものです。

幼少の頃 素読をうけた四書



戦後、博士はこれまでの学究的な態度に加えて、歴史的な時事問題や、歴史教育上の諸問題について、多くの論文を発表された。

今手元にある『歴史の扱い方』―歴史教育と歴史学―(中央公論社)、『日本の皇室』(早大出版部)等の内容が思い

初任の頃の津田博士についての思い出(2)

大澤 功

懸念を表明しておられること、後者では日本の皇室について当時のジャーナリズムの皇室または天皇についての見解を「わたくしに言わせると根本的に誤った見解」と指摘されたことである。この博士の見解は、戦前戦後一貫したも

のであったが、当時の世論は博士の考えの変化ではないかと注目した。
戦後の歴史教科書の件で、文部省は、『スミ塗り教科書』の通達を、都道府県に出した直後から、従来の皇国史観に

よった教科書では、新生日本の歴史教育にはふさわしくないと考えて、GHQ(連合軍最高指令部)の12・31指令で修身、地理、歴史教育が禁止される前に、当時の東京女高師の少壮教授だった豊田武氏に初等科国史の編さんを依頼していた。これは二十年十月



東洋文庫勤務時代の博士



昭和35年 帰郷した津田夫妻

会が設けられ、当時東大教授今井登志喜、和田清、坂本太郎、和辻哲郎、東京文理大教授肥後和男、浪人中の元東大教授土屋喬雄の各氏がメンバーで、岩手県平泉に疎開しておられた津田博士もその一員であった。博士は遠方在住のため、直接会議に出席されることはなかったが、豊田氏や文部省教科書局の岸事務官には「歴史の教科書は真実を書かなければいけない。あいまいな書き方をしないように。」とアドバイズされ、たびたびスシずめ列車にのって東京から、平泉に教えを乞いに行かれた両氏はかえって博士に激励をされ、「占領下で厳しい条件はあるが日本人の手による、新しい日本歴史を書こうと固く決心した」と当時を豊田氏は回想しておられるのをみて

も、古代史について科学的な見方をしておられた博士の終始一貫した学問的態度が伺える。
* * *
スクーリング(面接授業)の集中講義「史学研究法」で博士の東洋文庫研究員時代から約半世紀にわたって研究を共にされた石田幹之助博士の講義を聴いた。話の中に縷々津田博士の研究態度、方法が引き合いに出されて、難しい

内容ではあったが注意深く、親近感をもって聴くことができたことを覚えている。
津田の前に津田なく、津田の後に津田なし」といわれる程、前人未踏の高くて、深く、広い分野の研究を六十余年にもわたって続けられた、博士の人がらと、偉大な業績を郷土の誇りとして、子々孫々に語り伝えねばならないとつくづく思う次第です。

津田博士の書簡

尾関 公 見

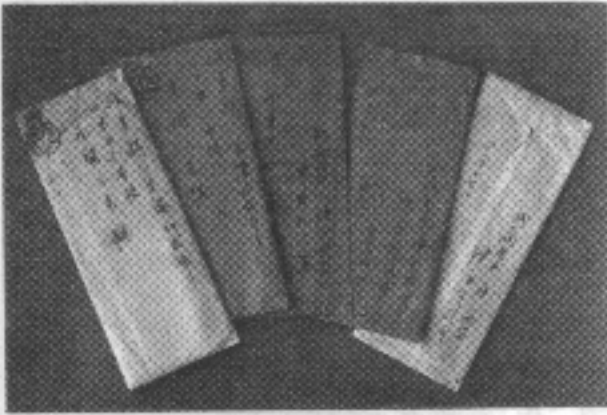
昭和三十三年一月、私は初めて津田博士をお訪ねし直接お目にかかりました。以後学問上の事には触れることなく色々雑事について何回もお尋ねの手紙を出しました。大学の先生方はじめ多くの方が博士にご迷惑をかけるからと遠慮して訪問をなるべく差し控えてお邪魔しても極めて短時間のうちに所要を終ることに心掛けられていたようでした。不明で無様な私は博士のことを少しでも書き留めて郷土に紹介したいと思い、たびたび投函しましたが、本当に申し訳なく恥ずかしいことを繰り返しました。

博士からいただきました多数の書簡はいずれも極めて簡潔明瞭で温情にあふれ、又謙虚な文ばかりです。そのなかで特に感銘をうけた一部を原文のまま転記して博士の崇高なお人柄を知るよすがとしたいと思います。

「……(略)……系図の織田美作守云々は、明白に作

りごとでありますから史学に関係のある私がさういうものを持ち出すことは困ります。むかしは京都に系図を作ることを商売にしてゐるものがあつて、頼まれるとでたらめのもの作ったのだそうです。織田美作守もその一例でありませう。

私の家では親貞を「御先祖さま」といつてゐて、それより前には溯らぬことにしてゐました。この「御先祖さま」は、菩提寺に墓もあり、それからの系図はたしかですがその前のは大部分作りごとなのです。



取りかわされた書簡の一部

いろ／＼取りあつめ御返事かた／＼右まで
十一月十二日
草々拝具
(傍点は筆者)

よく考えると博士はかの記紀(「古事記」と「日本書紀」)についてどの学者も出来なかつた文献的批判を徹底的にそして精緻に行われた学者で、真実を尊び私事においても誇張を絶対になされなかつたことは博士の信条であつたかと

思われ、今なお脈打つ感激のご教示です。
~~~~~  
(注)津田博士の書簡については現在刊行中の「津田左右吉全集」(岩波書店)のなかで詳しく紹介される予定です。